



日本精鉱社長 渡邊理史氏

トップに聞く Interview

三酸化アンチモン系樹脂難燃助剤の国内最大手である日本精鉱は、今期の業績が好調に推移している。2018年3月期の通期業績予想では、営業利益が前期比37%増の13億3000万円と過去最高を更新し、現中期経営計画(16-18年度)の最終年度目標11億円を前倒しで達成する見通しだ。自動車や電子部品関係の堅調な需要に加えて、アンチモンや銅の価格上昇も後押しする。渡邊理史社長に現状と今後の方針を聞いた。

—17年度前半を振り返って。

「1期のアンチモン事業は過去2番目の成績だった。自動車を中心に家に需要が良かった。生産能力に余裕があり、受注増にも対応できた。顧客ニーズに応えるきめ細か

い営業活動を推進しており、コミュニケーションを密にしながらニーズの先取りも意識している。アンチモン地金の相場が前期を上回るトン8000円が台で推移し、為替が安定していたことも寄与した。やるべきことをしっかりとやることが好調

田工場はフル操業、つくば工場も高稼働な状況が続き、鉄系合金粉の能力増強を実行する。

—つづは工場は銅粉2ラインに貴金属粉が1ライン、試作用が1ラインだったが、新たに大型炉を導入し、鉄系合金粉の

能力を活用した効率化、省人化も検討したい」と上海支社の状況は、

初の通期黒字化を達成できそうだが、日本精鉱全体の上期(4-9月期)アンチモン製品販売数量は前年同期比約1割増だったが、上海拠点の伸び率は日本国内を上回って

に配合される固体潤滑剤に使われる硫化錫を製造する。計画よりやや遅れているが、来年度の廃棄と空スペースの活用などを考えている。中潮製錬所の厚生棟の更新なども検討している。将来的な人材の確保も考えて、働きやすい会社にしていきたい」

—特定化学物質曝露予防規則(特化則)による影響は。

「厚生労働省の定める労働安全衛生法と労働安全衛生規則の一部改正で、三酸化アンチモンが新たに指定された。17年6月1日に施行されたが1年間の猶予期間がある。大手ユーザーは自前で対応策を立てているが、小規模ユーザーは設備投資が難しい。樹脂の種類ごとに対応が異なるが、難燃助剤を樹脂で固面化しては向上が期待できる。当面は景気が向上し、期待もできる。挑戦していきたい」

につながっている。ただ、1-3月期はやや減速するところもある。

「金属粉事業では、銅粉はスマートフォン関連に加えて軟磁性材向けの販売が堅調だった。銅価の上昇を受けて販売価格が上昇した。鉄系粉末は自動車部品や家電部品向けが堅調に推移した。野

生産能力(溶解ベース)を25%増強し、18年前半に生産を開始する。これに建屋が埋まったので、次期中計では第2棟の建設も考えなければならぬ。顧客のニーズや第1棟の改善点を考慮しながら設計することになる。

おり、全体に占める比率も1割程度まで増加している。顧客は日系メーカーが中心で品質に対する要求が高い。現地メーカーに生産を委託しているが、毎年厳しく監査して品質を保っている。

「主に生産性の向上のための細かい投資が中心も検討している。問い合わせ

わせば増えているが、真摯に対応していく」

—現中計の進捗状況は。

「順調に進んでいる。生産性の向上は永遠の課題だが、省人化や自動化などのテコ入れも進めており、来期以降着実に寄与している。最終年度の数値目標は前倒しで達成できそうだが、安定的に10億円以上の利益を上げられる体質を目指す。14年に策定した2020・2000・20ビジョン(20年に売上高200億円、営業利益20億円)の実現には、大きなステップを踏まなくてはならない。つづは工場の第2棟建設や、M&Aなどを検討する必要が出てくるだろう。当面は景気が向上し、期待もできる。挑戦していきたい」

(芳賀 陽平)

車・電子向け需要好調

金属硫化物、開発進める